



60年「心に残る」を目指して、「学び」の仏壇道

話し手 古市美人仏壇店 会長

古市美人さん (昭和18年5月27日生)

聞き手 希望が丘学園 鳳凰高等学校 普通科 1年



仏壇にそそいだ60年

もともと、私のじいさんが仏壇の行商をしよってね。中学校卒業した頃に、じいさんの勧めで仏壇仕事の訓練校に行ったの。修行中は本当にきつくて。その頃は朝から晩まで仕事をしたり、漆との戦いで肌がかぶれたりしても、お給料はほんとに雀の涙で。きつい仕事だから途中でやめようと思ったこともあったけど、「きばらにゃいかん」ち思っで、60年やってきたの。きつい仕事だけでも、作った仏壇に拜んでいる姿を見ると、この仕事をしていて良かったなあって思うねえ。それが本当にやりがいだと思いますよ。



川辺でも挑戦したウルシ栽培

昭和50年頃に川辺仏壇が伝統的工艺品に指定されて、それから県の働きかけもあって川辺仏壇組合がウルシの木を勝目に植えたことがあったね。

当時、勝目に県が所有した競馬場跡の一部を、組合に貸してウルシの木を植えた。20年くらいは、組合員で草払いして管理をした、一般の人に頼むと漆負けしてできないのよね。そして、そこから漆を取るとなったら、福島とか北陸の漆掻き職人を呼んで、一本の木に刃をいれて、それで汁(漆液)を出す。もう地道な仕事よ。だから国産の漆は高いのは何万もするのよ。漆栽培は、管理の問題や遠くから漆掻き職人を呼んでくるコストもかかって、今はもうなくなってしまったね。



仏壇作りの厳しい現実

昔ながらの仏壇は漆塗りだから、深いところからの光があって本当に綺麗な。ただ、昔ながらの仕事をしていりゃあ綺麗だけどコストは高くなってしまっし、時間も手間もかかってしまっし、仏壇の単価が高くなる。そうすると仏壇は売れなくなる。だから、最近は化学塗料が出てきたんだけど、綺麗に吹きつけるのがまた難しい。ただ仕事をするばかりは誰でもできるけど、お客さんが買ってくれる綺麗なものを作るにはやっぱり塗料の勉強はせにゃいかん。

昔ながらの伝統のものも残していきながら、最近は現代風のものも作るようになったねえ。



これからの仏壇組合を見つめて

もっともっと仏壇界を元気にしていきたいねえ。以前、私もそうだったけど、是非、若い人たちにもどんどん仏壇の技術を競うコンクールに出て、腕を磨いてほしい。職人であるなら、恥をしのんでもコンクールに出て、全国の仏壇を見て学ぶ。もちろん、1番になるっちゃうのは簡単なことではない。だから勉強になるのよ。勉強をして、時代に合わせて変わるところは変わって、そうやって仏壇界をどんどん良くしていきたいねえ。

聞き書きコラム



洞窟と信仰と川辺仏壇

南薩最長の川「万ノ瀬川」。この源流のひとつが川辺町を流れる清水川だ。清水川には高さ約20m、長さ約400mの溶結凝灰岩(入戸火砕流)の岸壁がある。この岸壁には「清水摩崖仏群」という五輪塔や宝篋印塔、梵字、仏像など200基が彫刻されている。かつて川辺の人々は、薩摩藩による一向宗の禁制(1597年)や明治初期の廃仏毀釈を逃れるため、自然の地形を生かし、洞窟などに隠れて布教する「隠れ念仏」を行い、密かに信仰を守り続けた。仏壇も、タンスに見せかけ、扉の中に隠したものを作り続けた。今日、川辺仏壇に見られる「ガマ型」には、その要素が色濃く残っているとされている。

執筆: 鳳凰高等学校 普通科 2年 東垂水 颯良